

# 藝術を愛する女に

江馬修

此ごろの若い婦人の方は、大へん藝術に興味をもつて居るやうに思はれます。中にはたゞ趣味といふだけでなく、もつとそれが進んで、自分が小説や戯曲を書いて、所謂文壇的な闊秀作家にならうとしてゐる方もかなり多いやうです。

僕など、時々さういふ人から相談を受ける事があります。そして「自分は作家として立つて行けるでせうか、何うですか。」とか「文壇的に有名になるには？」などといふ問題について、明確な答へを望んでゐられる様ですが、斯うした問題に就ては、一度や二度會つた(中にはいち度も會つたことのない人もあります)だけのことで、なかく何う斯うと斷言出来るものではありません。もしできるにしても、僕のやうな人間には大へん困る問題です、これが婦人の方では猶更です。

しかし、藝術を愛してゆく。といふだけのことなら僕は非常に喜びたいと思ひます。今迄の甚だ非藝術的な日本婦人の生活に、些しでも藝術を愛するといふ傾向の見えるのは、單に婦人の向上といふばかりでなくて、日本國としても甚だ喜ばしいよい事です。

る。とさう僕は思ひますから――。

けれども、僕は確固とした天分を持つてゐる方には決して「おやめなさい」と言ひません。しかし、一歩考へてみると、現在の所謂文壇的な闊秀作家を望んでゐる方は、藝術そのものよりも藝術を一種の手段として世間的名聲を得ようとする淺薄な觀念から出立して居るのではないかと思はれます。ですから僕はほんとに藝術を理解し、相當に天分のある方でない限り、婦人が作家を志すといふことはおすゝめしたくないと思ひます。それよりもさうした婦人には「女」になる事をおすゝめします。ほんたうの「女」になるといふことは、大變むづかしい事です、そのほんたうの「女」は尊いものです。

ロマン・ローランは「ジャン・クリストフ」の中で、

「善良な女は、天才ある男が稀である如く稀だ。」と云つてをります、又「本當に女になるといふことは本當に男になるよりも難い。」とも云つてをります。

この言葉には僕も同感してゐます、此頃の所謂藝術家といふ女の人々の一人よがりの、我慢のならない氣障な態度を、僕は心から唾棄します、さうした若い女の小賢しい生意氣よりも、善良な家庭の女のつましさをいく層倍僕は尊敬するかわかりません。

以上僕は獨身婦人の藝術家志望のことについてお話ししましたが、すこし家庭生活における婦人の、藝術について語るといたしませう。

## ○ 闊秀作家の印象

青い鳥

### ▼ 水野仙子さん

水野さんのお名前は、古い頃の「女子文壇」などでよく存じてをりました。いま文壇にしつかりした闊秀作家の一人として、迎へられて居られるのを見るのは何だか懐しくも思はれます。

割合にじみなお仕度をした水野さんは「此の頃賑たり起きたりして居ります。どうも身體がいけないものでして……」口元に笑つた水野さんは、火箸をとつて中の灰を掻き廻されました。それからお茶を入れて下さいます。

「いつそやの讀賣へ」或る妻の手紙をお書きでしたと云へば、

「ええ、あれなども決してよい作では御座いません。なかく自分で安心出来るやうなのは書けません。」と仰言る。水野さんの作にも出てゐるテリケートな人

なつこい處を、かうして、對座してるとそれと同じな感じを受けました。いろいろお話を伺つてお暇しようとする、玄關まで送つて来て下さいました。「すあふんひどい風ですれ。」表へ出ようとした時、パツと吹き込む風。御病身の水野さんへまともに當つては、とためらはされました。

### ▼ 與謝野晶子さん

お庭の梅に暖い春日が射して、白い花がほつと咲いて居りました。

「母さん、いらしつて。」「えい。」玄關に遊んでゐた七瀬さんに取次いで頂いて二階へ通される。

「此頃もう忙しいばかりです。」

椅子へ背をよせた晶子さんの姿が非常に大きく見えました。文壇のさる人が晶子さんを評して、

「あの人は日本のエレン、タイだ。」と言はれたことなどを思ひ出した瞳に、壁にかけた未來派らしい繪がうつりました。「あれは、フランスの畫家の描いたもの